アブラチャン・ケアブラチャンの由来・語源

横　山　健　三

1. 名前の歴史（名称史）

1) 黒田斉清の『本草啓蒙補遺』という江戸時代の本にアブラチャンとあり、最初の記録である（本の発行年代は不明であるが、著者は1795～1851年）。

2) 松村任三の『日本植物名彙』(明治17年・1884年)に「ムラダチ・アブラチャン・コヤスノキ」と、三つの名前が載っている。

3) 現在はアブラチャンが標準和名になっている。ケアブラチャンは葉の裏に毛のある品種である。

2. 語源の説明・紹介（語源説・由来）

1) 油瘡青説 ◎アブラとチャンが合わさって、できた名前だろうという説

① 牧野富太郎の『牧野日本植物図鑑』(昭和15・1940年）に「和名は、この果実ならびに樹皮に油が多く、よく燃焼するから、油ならびにチャン(瘡青)を合わせて名にしたのだろう。」とある。＊チャンは防腐用塗料やアスファルト・ピッチ。英語のchianという。

② 『牧野新日本植物図鑑』と ③ 『原色牧野植物大図鑑』は、大体、同じことが書いてある。

○ 小学館編『日本国語大辞典』(昭和47年・1972年）に「あぶらーチャン［油瘡青］」とある。牧野説の採用。

2) 油チサ・ヂサ転訛説◎アブラとチサ・ヂサとが合わさって、できた名前だろうという説・(チサはエゴノキの古語)

① 白井光太郎の『樹木和名考』(昭和8年・1933年）に「私が考えるにアブラチャンはアブラヂサの転訛したものだろう」とある。

② 上原敬二野『樹木大図説』も同じ説である。

3) 油茶転訛説◎アブラとちゃ・茶とが合わさって、訛った名前だろうという説

① 白井光太郎の上記の本に「ドイツのラインという人が、果実が茶に似て油が多いからの名前」と紹介してある。

② 明治時代の『農芸大辞林』(明治40年・1907年）にアブラチャンの説明に「実は茶の実に似ている」とある。

○ 私はアブラチャンの実物と名前を初めて知った時に、これはアブラチャがアブラチャンに訛ったと考えた。アブラチャンの果実と種子がチャの果実と種子に酷似しているからである。チャの名前は平安時代からあり、喫茶の風は鎌倉時代からである。

○ クロチャン・クロチャ・チャガラなどの方言がある。アブラ（油採取用）とチャ（茶果実種子類似）との合成である。

ケアラチャン（花）
中頸城郡津南町足滝（1993. 5. 8）

ケアラチャン（果実）
東蒲原郡上川村室谷（1993. 10. 2）

ケアブラチャン（果実接写）
東蒲原郡上川村室谷（1993. 10. 2）